慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	James J. Sheehan, Liberalism and society in Germany, 1815-48 : Journal of modern history 45 (Dezember 1973)
Sub Title	
Author	東畑, 隆介(Tohata, Ryusuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1977
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.48, No.2 (1977. 6) ,p.107(219)- 111(223)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19770600-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

James J. Sheehan, Liberalism and Society in Germany, 1815-48: Journal of Modern History 45 (Dezember 1973)

東畑隆介

三月前期（フォアメルツ）のドイツ自由主義に関しては、ドイツ本国に於ても文献が乏しく、未開拓の領域に属すると云えよう。ノースウェスターン大学教授でルヨ・ブレンターノの伝記[1]の著者として知られているジェームズ・J・シーハン教授が Journal of Modern History に発表した論文 "Liberalism and Society in Germany, 1815-48" は、自由主義とその社会的基礎との関連という重要ではあるが、従来、余り検討されなかった問題を扱っており、三月前期の自由主義の問題の解明に寄与するものと思われる。以下にこの論文の論旨を紹介してみると、

著者は、先づ自由主義とドイツ社会との間の関係を考察することが、この論文の目的であると述べて、ドイツ自由主義の起源を社会階級の利害の中にでなく、学者の理論の中に求めるトライチュケによって代表される傾向や自由主義を企業家ブルジョワジーのイデオロギー的表現として把えるハメロウの見解を、ともに一面的だと批判して、自由主義運動の支持の基盤を考察する。

多くの歴史家は、一九世紀半ばの自由主義の社会的構成の手引きとして、一八四八年のフランクフルト議会を利用してきた。同議会を職業的に分析してみると、議員の八〇％が大学教育を受けており、ビジネス及び農業に関係するものは二〇％弱である。しかし、余暇に恵まれた教養エリートが、不定期間、故郷を離れることが出来たのに反して、経済的な事業の関係者が、一定期間、彼等自身の地域社会を離れることが極めて困難であったという事情を考慮するならば、フランクフルト議会を一九世紀半ばの自由主義の政治的リーダーシップの鏡と見ることは、ひとを誤らせることになる。不定期間、故郷を離れることが可能なもののみが、フランクフルトに於て指導的役割を演じる一方、自由主義の他の一部は、より地方的な基礎をもつ政治活動に甘んじねばならなかった。経済的事業に従事するものにとって、最も重要な政治制度は地方自治の諸機関であった。多数の都市において、手職人、店主、商人、工場主などが自由主義的な意見・組織の普及に指導的な役割を演じた。都市及び市会を調べてみると、「教養と財産」についての昔からのきまり文句が暗示するよりも自由主義にとって遥かに多くの異質的な社会的基礎が見出される。例えば、一八三二年のハンバッハ祭典への参加の故に官憲によって記録されたファルツの住民たちの職業を考察してみると、大学関係の職業二九名、大学生五七名に対して、経済的事業の関係者は一〇一名（そのうち、三六名は店主及び商人、三四名は手工業者として記録さ

れている）であり、シュテファン・ボルンが認めているように、「小ブルジョワ的中産階級は全く自由主義化し、名望家、商人、官吏の自申主義的見解を共有した」のであった。

従来、歴史家は国民的な指導者や知的な代弁者に注意を集中してきたため、このような複雑さは看過され勝ちであるが、自由主義陣営の社会的多様性を忘却することは、ゆゆしい誤りである。ドイツ社会に於ける自由主義の位置の最も顕著な特徴は、知識人、官吏或いは経済ブルジョワジーの優勢ではなく、寧ろ、自由主義の運動が上は土地貴族から下は無産大衆に至るドイツ社会の全範囲からの人々を含んでいるという事実である。またそれらの社会の中間的身分を形成するために結合した様々なグループ間及びグループ内に存在する相違点が見落されてはならない。大部分の地域において、三月前期における自由主義運動の重心は、工場主や金融業者の小グループでよりも小企業の所有者の方により近かった。

社会変化に対する自由主義の態度の歴史的解釈には、自由主義の社会的基礎に関する見解と同様、二つの見解――自由主義運動におけるイデオロギストの役割を強調する見解と自由主義を興隆しつつあるブルジョワジーと結びつけ、経済的自由と産業主義の中に自由義的社会概念を求める見解――があるが、前者は、自由主義者が彼等の社会像によって影響される度合いを過小評価し、後者は、社会・経済的発展についての自由主義者の見解の相違や曖昧さを見落すが故に、これら二つの見解は、自由主義の立場を歪曲するものである。

三月前期の自由主義運動の中には、様々な社会経済的見解が含まれていた。例えば、一八三〇年代のバーデン、ヴュルテンベルクなどの諸国の自由主義者は、自由貿易と保護主義の問題をめぐって深刻に分裂した。経済政策の問題についての自由主義者の見解の相違は、社会経済発展の基礎に関する彼等のより重要な見解の相違を反映している。例えば、都市の歴史的な意義の評価についてみると、ハインリッヒ・フォン・ガーゲルンにとって「都市は知性の所在地、文明の発祥地、自由の中心である」のに対して、ロバート・フォン・モールにとって、都市は社会悪の重要な源泉である。都市の発達と同様に、産業主義の普及は、自由主義運動の内部に希望と不安とを起び起こした。工場の普及を政治的進歩や物質的な豊かさや国力などの基礎と見做す産業主義の率直な擁護者は、もちろん存在したが、一部の自由主義者は疑惑或いは嫌悪をもって工場生産の増大を凝視していた。

営業の自由についての自由主義者の諸見解の中にも同様の構成を認めることが出来る。プリンス・スミスのような人物は、需要と供給の法則が無制限に機能し得る自由な市場への必要な一段階として営業の自由を歓迎したが、多くの自由主義者はこれに異論を唱えた。ロバート・フォン・モールは経済的自由を支持したが、それは無制限な市場経済を見ることを望んだからではなく、人々に小規模の、独立的な生産者の地位に入る道を開くことを望んだからであった。

多数の自由主義者は、経済・社会生活に対する伝統的拘束の緩和がより大きなそしてより広い基礎をもった繁栄への機会を提供することを認めたが、無制限の競争が最も経済的に進歩した少数者の利益となり、それによって、富者と貧者の間のすでに危険なものになっているギャップを広げることを恐れていた。一八四〇年代に、社会的無秩序の兆候が明白になるにつれて、このような脅迫感は益々強烈になった。ある同時人が「巨大な力」と呼んだものを意識する自由主義者の数は増大した。

自由主義者の間には、如何にしてこれらの巨大な力を抑制するかについての一致はみられなかった。それにもかかわらず、この危機感に対する多数の、様々な反応の中に、我々は二つの支配的な主題を見出すことが出来る。第一に、大多数の自由主義者は、小規模の独立的な生産者、職人、農民などの没落していく運命の中に「社会問題」の本質を見出した。一八四〇年代の自由主義の社会改革の大半は、この趨勢を逆転する方法を見出すことに向けられる。

三月前期における社会問題に関する自由主義的著作に繰り返される第二の主題は、社会的無秩序に対する必要な防壁としての国家の強調である。例えば、ロバート・フォン・モールは、特定の事情の下では、国家は過剰人口の分裂的な衝撃を減少させるために、市民の結婚する権利を縮少もしくは彼等を強制して移住させねばならぬことを認めている。社会過程への国家の介入への要求は、三月前期における彼等の歴史的体験のみならず、深くしみ込んだ思想の習癖を反映していた。社会的混乱状態に対する必要な防御としての国家観は、ヘーゲルの諸著作において最も体系的で影響力の大きい形をとって現れている。イギリスの古典的自由主義の見解を最初にドイツに導入した自由主義経済学者の中にすら、我々は、国家なしに済ませることへのためらいと社会経済生活において官僚に創造的な役割を割り当てようとする傾向を見出すことが出来る。もちろん、三月前期には、自由放任経済学の完全な反国家主義的論理を受け入れた自由主義者は存在した。しかし彼等を自由主義運動の代表者と受けとることは誤りである。寧ろ、社会経済的変化の明瞭な恩恵について疑念をいだき、国家を社会の進行における必要なパートナーと見做した人たちの方が、自由主義のイデオロギー的中心に近かった。

自由主義者の思想と彼等の社会的世界との間には、厳密な相関関係は存在しなかった。それにもかかわらず、自由主義運動の社会的位置と自由主義の社会像との間には、顕著な関係がみられる。自由主義運動の社会像の多様性は、自由主義運動の異質的な社会的基礎を反映している。自由主義運動の社会学的中心が中間的な社会・政治的地位のグループであったのに対応して、自由主義思想の中心は、権威の伝統的な中心の全く外側で行われる進歩を心に描くことを好まず、強力な中産階級によって約束された安定性にひたすら執着した人々であった。従って、変化及び彼等の社会的役割についての諸見解において、三月前期の大部分の自由主義者は、伝統的社会の魅力と挫折、将来の魅惑と危険との中間の道

を見出す必要に面していた。

今日、我々は、三月前期における自由主義者の社会的多様性が一八四八年以後の自由主義運動の分裂の一因となり、自由主義者が社会変化の方向に対して感じていた愛憎が、一九世紀後半の彼等の政治的努力を掘り崩した自己疑惑と不安への道を敷くのを助けたことを回顧することが出来る。しかし、三月前期においては、大部分の自由主義者は、彼等の多様性や反対感情の両立よりも彼等を統合した結合力や彼等の進歩への希望を支えた確信の根源の方を重視した。

三月前期における自由主義者の共通の目的意識は、政治・社会的反動に対する彼等の闘争の中で鍛えられた。自由主義運動内部の社会・政治的分裂は、それに関して大部分の自由主義者が一致しているように思われた遥か彼方の目標や一般的原理にとって未稍的なものと過少評価された。

一九世紀前半の歴史的情況（イギリス、フランス、ベルギーにおける反動的勢力の後退）も自由主義者が社会の変化の性質について感じていた不安を和らげた。進歩の理念のイデオロギー的な力は、未来についての自由主義者の疑念を和らげるのに役だった。また三月前期における用語が極めて不明確であったことも、自由主義の不統一感を鈍らせ、彼等自身の運動とその歴史的背景の社会的現実の理解を困難にした。大部分の自由主義者は自らを中産階級に属すると考えたが、一部の自由主義者にとって、「中産階級」という言葉は「財産と教養あるもの」というかなりの限定された階層（一般にブルジョワジーという範疇の下に含まれる社会集団）を意味したのに反して、他の自由主義者にとって、それは、小商店の所有者、独立の職人などを意味していた。のみならず、中産階級という言葉は、自由主義者がしばしば「国民の核心」と呼んだもの――全体としての社会にとって最良のものを代表しているひとたちの道徳的な位置――を指して言う場合に用いられた。従って、中産階級は単に社会の一部ではなく、社会の真の利益の社会的位置であり、自由主義は単に国家における意見の一部ではなく、公共善の政治的表現であった。

一八四〇年代の終りには、自由主義的統一のレトリックは、自由主義運動の内部的不一致という現実によって脅かされ始めた。一九世紀半ば以後の社会・経済的変化の速められたテンポは、自由主義者の間の社会的分裂を増大させた。工業化は中産階級の性格と相互関係とを根本的に変化させ、それによって自由主義運動の外見上の統一を支えていた脆弱な社会的な連合を粉砕した。

自由主義内部の分裂が拡大するにつれて、未来についての自由主義の疑念は増大した。社会不安についての自由主義者の恐怖は、階級的敵意と化した。それと同時に、中産階級を拡大することによって革命をそらせる彼等の力量への自由主義者の信頼は衰えた。一九世紀の末には、多くの自由主義者が大衆から永遠に隔離されていると信じるようになり、社会的無秩序に対する必要な障害としての国家に頼る傾向を強めた。一九世紀の後半には、社会変化の方向についての自由主義者の不安の核心に、社会進歩につ

いての彼等の愛憎相半ばする感情の核心に、より重大な疑惑――彼等自身及び社会・政治権力への彼等自身の要求の正当さへの疑念があることが明らかななった。

以上がこの論文の要旨である。著者が指摘しているように、三月前期の自由主義は、従来、主として政治思想の面から或いは漠然とブルジョワイデオロギーとして把えられてきたため、社会との関連において論じられることが少かった。また自由主義運動の推進者であるブルジョアジーの実態も余り明らかでなかった。従って、社会との関連において自由主義を把えようとする著者のアプローチは、未開拓の領域の解明に寄与するものと思われる。また従来の研究がフランクフルト国民議会に関心を集中したのに対して、地方の自由主義の活動に焦点をあてたことや、ややもすると単一的に把えられがちな自由主義運動の担い手や自由主義者の社会観の多様性の指摘やそれらから生ずる自由主義運動が内蔵していた分裂性の指導などは、自由主義の本質の理解にとって示唆に富むものといえよう。

(1) James J. Sheehan, The Career of Lujo Brentano. A Study of Liberalism and Social Reform in Imperial Germany, Chicago 1966.

執筆者紹介

伊藤清司　慶応義塾大学文学部教授
戸沢行夫　同　文学部講師
三宅和朗　慶応義塾大学院博士課程
三上朝造　同
東畑隆介　慶応義塾大学文学部助教授